



PRO-LIFE NEWS

(中絶に反対する運動)

〒780 高知市新本町一丁目七番三十一号

生命を大切にする社会に

濱尾 文郎

横浜教区司教／日本カトリック司教協議会副会長
社会福祉委員会委員長／国際協力委員会委員長

医学が発達し、医療制度も改善されてきた現在、かつて人間の生命が脅かされる現実が増えてきました。臓器移植の可能性は、幼児の臓器を取り上げるために幼児を奪って売り、殺害するという行為にまで及んでいます。胎児の健康状態や性別を調べて、障害者であったり親の期待に反した場合には、処置をすることもあるようです。中国のような一人っ子政策は、沢山の問題を抱えています。日本では、それほどでは無いにしても、親の経済状態によって胎児を墮ろす人口妊娠中絶が合法とされている国は、世界でも珍しいと聞きます。

医学が発達し、医療制度も改善されてきた現在、かつて人間の生命が脅かされる現実が増えてきました。臓器移植の可能性は、幼児の臓器を取り上げるために幼児を奪って売り、殺害するという行為にまで及んでいます。胎児の健康状態や性別を調べて、障害者であったり親の期待に反した場合には、処置をすることもあるようです。中国のような一人っ子政策は、沢山の問題を抱えています。日本では、それほどでは無いにしても、親の経済状態によって胎児を墮ろす人口妊娠中絶が合法とされている国は、世界でも珍しいと聞きます。

命は神から与えられたものです。人間は神の似姿に創られました。そして「神は、その独り子をお与えになつたほどに、世を愛された」(ヨハネによる福音書3章16)のです。その独り子は、「自分の意志を行つたためではなく、わたしをお遣わしになつた方の御心を行つたためである。わたしをお遣わしになつた方の御心とは、わたしに与えてくださった人を一人も失わないで、終わりの日に復活させることである。わたしの父の御心は、子を見て信じる者が皆永遠の命を得ることであり、わたしがその人を終わりの日に復活させることだからである」(ヨハネによる福音書6章38-40)と明言し

ておられます。

神の創造の業では、人間はその似姿に創られ、おん独り子の救いの業は、人間が永遠の命を得て、終わりの日に復活させられることであるというのです。つまり、神の創造と救いの業の目的は、人間が永遠の命を得て復活させられることなのです。ですから人間は決して何か他の目的の手段となつてはならない存在です。人間そのものが神の業の目的であるように、わたくしたち人間のすべての業は人間を目的とすべきなのです。医学の発展のためにも、環境問題や人口問題の解決のためにも、一人の人間も他の人間の手段となつてはいけません。弟、妹を殺して、兄や姉がよりよく生きることは出来ないのです。日本が本当に生命の価値を見直す時を迎えることを願いつつ。

父、夫への呼びかけ

ステイヴ・ウッド

「聖ヨゼフ会『Saint Joseph Covenant Keepers』は聖ヨゼフを守護者として仰ぐ、形式ばらない男性キリスト信者の国際ネットワークです。」この記事にある8つの誓約にあるように、家族の絆を強めることを目的としています。」

八つの誓い

以下の八つの約束を守るのは、簡単なことではありません。どんなときでも、キリストに従う人は、必ず狭い道を通るものです。広い道は、たやすいように見えます。しかし、実際、疑うことをしないで、広い道を選ぶ人たちがたどることになるのは、心痛と圧倒するような困難の道です。現代の家庭生活を何とか支えようとすると、い

信者の父親としての召し出しに応える呼びかけから始める他ありません。

1 聖家族の優しい指導者であり、頭である聖ヨゼフに従うこと

聖ヨゼフは、天国のすべての聖人の中で、もっとも優れた方です。神の計画におけるその偉大さは、聖なる乙女マリアの浄配であり、イエス・キリストの父親であったことに由来します。カトリック男性として、わたしたちは、聖家族にならって、わたしたちの家庭を指導する召し出しを果たすために、聖マリアだけでなく、聖ヨゼフの取

り次ぎも願います。

父親として、また夫として、わたしたちは、聖ヨゼフの模範にならって、わたしたちの家族の優しい指導者、頭であることを約束します。

わたしたちは、自分たちの家庭で指導者としての役割を無責任に放棄したり、罪深い抑圧とか家庭内独裁によって、わたしたちに与えられた指導者としての地位を乱用しないことを約束します。家庭内では、父親として、また、夫として、指導者の役を果たすと同時に、夫と妻の間にある完全な平等性も、同時に、受け入れます。

2 命ある限り、わたしたちの妻を愛すること

キリスト信者の夫として、わたしたちは、キリスト教の結婚は、それが合法なものである限り、解消不可能であると信じます。わたしたちは、生涯続く契約の絆である婚姻の秘蹟が、新しい契約によってわたしたちのものになった、あふれるばかりの恵みによって、可能になったことを信じます。わたしたちは、それが、解消可能な契約であるとは、思いません。婚姻の契約が、解消不可能であることは、婚姻と家庭の未来の基礎です。父

親として、わたしたちは、子どもに与えることのできる最大の贈り物は、わたしたちが、婚姻の誓いに忠実であるということ、信じます。わたしたちは、正当な結婚を解消することが、家庭にとって有害であると信じます。もし、家庭内で問題が生じたら、わたしたちは、離婚でなく、結婚を癒すための助けを求めます。また、仲間にも必要であれば、助けの手をさしのべます。深刻な結婚問題がたとえ存在しなくても、わたしたちは、結婚を健康に保つために必要な手段を執ります。わたしたちの妻に対する生涯の忠実を守るために、わたしたちは姦淫の罪を犯す機会を避けます。

3 キリストこそ

家庭の主

わたしたちの家庭の指導者として、わたしたちは、キリストこそ、わたしたちの家庭の王であることを、ここにはつきりと宣言します。そのために、わたしたちは、毎年、各家庭で、イエスの聖心の着座式をしてもらいます。イエスの聖心の着座式は、イエスの聖心と親子の心の中に、さらに大きな愛をもたらして、家庭生活を、さらに意味深いものにすることを信じます。キリストが、その優しい主権で、わたしたちの家庭に臨在して下さるために、わたしたちは、毎日、家庭の祈りと聖書朗読をするように努めます。主日に、わたしたちの家族は、ともに主を礼拝し、わたしたちの家庭生活と一致の究極の源であ

るご聖体の中のキリストを受けます。

4 子どもたちにわたしたちの心を向ける

現代の父親が、富、個人的楽しみ、娯楽に惹かれるのは、ごく普通に見られる現象です。聖ヨゼフ会員として、わたしたちは、子どもたちを大事にします。具体的には、子どもたちを心から愛し、彼らを優先することとは、特に、彼らとともに過ごす時間に反映されねばなりません。子どもたちは、どれだけ自分たちが愛されているかを、父親が自分たちと共にいる時間で計ります。現代世界で、時は金なのですから、わたしたちはお金よりも、子どもたちの方を大事にし、彼らを最優先しなければいけないと思います。

5 子どもたちに主における規律と教育を授ける

両親は、自分の子どもたちの最初の、また、第一義的な教師です。父親は、特に、聖書の中で、子どもたちの教育に、責任があるものとされます。(創世記11:9、詩編78、エフェソ6:4) 自分子どもたちに、信仰のことを教える父親たちの、この大いなる特権と義務は、子ども達が幼い頃抱く疑問、中・高校時代の仲間からの圧力、そして、大学生活をうまく乗り切るといふ信仰の実を結びます。

6 家族を守る

父親として、わたしたちは、物理的、霊的、道徳的害毒から自分たちの家族を守ります。わたしたちの

子どもの純潔を守るために、わたしたちは個人的に責任を持ち、積極的な役割を果たします。わたしたちは、子どもたちの性的潜伏期、純潔さ、清さの壊れやすい性質を乱し、破壊しようとする、すべてのものから、子どもたちを守ります。

7 家族を養うこと

父親として、わたしたちは、家族の経済的な安定を、第一義的な責任とみなします。わたしたちは、家族の中で経済的に仕えることのキリスト教的原理を学び、適用するように努めます。可能な限り、わたしたちは、妻が、子どもたちを自宅で食事させるようにさせます。

8 岩の上にわたしたちの結婚と家庭を建てる

聖ヨゼフ会員として、わたしたちは聖ペトロの後継者の教えに従って、岩の上に、わたしたちの家庭を建設するよう努めます。わたしたちは、結婚、家庭、人間の性に関する歴史的に根拠のある教えを学び、それに則って、生きるよう努めます。

これは、家族計画に関する教会の教えを含みます。教会の教えに忠実な夫婦の離婚率は、わずか5%に過ぎません。結婚に関する創造主の計画に従うものは、自分たちの結婚が強力に守られていることを、日々、発見しつつあります。その逆に、急上昇している離婚率は、産児制限に関する教会の教えを無視することに、正比例してい

ます。

聖ヨゼフ会は、まさに、家庭に革命を起こすこと、文字通り、世界を変えることのできる、この千載一遇の歴史的な分岐点に差し掛かっています。結婚の絆の不可消性は、家庭生活において契約を守るためには、欠かせないものです。家庭の福利に関するキリスト教的愛は、わたしたちに、この真理を無視させようとすると誘惑に断固として打ち勝つことを要求します。マラキのよつに、わたしたちは、この生涯にわたる契約を守ることを忠実な証人でなければなりません。

現在の時代

ノボトニー・

ジエリー

預言者エレミアが、神よりも人間を信ずる者への神の警告を私達に告げてからすぐに、彼は次の詩を紹介しています。

主によりたのむ者は幸せである。

主は、彼の希望となられる。

彼は、水のほとりに植えた木のように、

その根を川床にのびし、暑さのときも恐れなく、

その葉は緑のまま、日での年も衰えず、

実を結び続ける。

神にもらったこの詩は私達が生きなければならぬ今の時代に最もふさわしい読み物です。というのは、世の習わしに従っている人達だけが進歩を遂げ、有名になり、影響を与えているようにみえることが時々あるからです。そのようなに思われるのは、私たちが、あやまった生き方を習っている人達しか、見聞きしていないからでしょう。たとえば、「予定外の妊娠」や「非嫡出の子ども」といった言葉の使い方を考えてみましょう。

今、私は道徳の相対性の海でもがいている日本の若者達に、神を愛する心を復活させるような計画を政府が考えだしているように思えないのですが、あなたはどうでしょうか。しかし、私は、避妊具の使い方や中絶医の紹介や、子どもを産むことを選んだ母親に対して政府が助成金を出すことを拒むといったことに、ずっと重点

を置いている政府の計画は想像できません。あなたにはできませんか。

政府はそれをそのまま直接には言わないでしょう。政府は大事なことは非嫡出の妊娠の数を減らし、若者に責任ある行動の仕方を教えることだと言うでしょう。政府はそのように言うでしょうし、私達は政府の言うことを信じない狂信者で、馬鹿者なのでしょう。

この短い文章では、一つの例を示すことしかできませんが、要点はおわかりになると思います。

私たちは日々いかなるときも信念を持って生きることによって、他の人に神に通ずる道を教えようとする情熱を失わないように、水辺の土にしっかりと根をおろしておかなければなりません。私たちは道徳的原理を守るために

立ち上がり、単にその子どもたちが望まれていないという理由だけで、あらゆる手段を用いて地球から子どもたちをなくそうとしている人達に決して負けてはなりません。

神はずっと私達を愛してくれています。そして、このような道徳的な激動の時代においては、私達は神に感謝し、いつも神に対して従順でいられるような手助けをして下さるよう神にお願いをしましょう。そして、私達が神の子どもたちを守ろうと精を出している今、神のために私たちのこの命を捧げることを誓いましょう。

生への福音

法王から「社会改革への果敢なる提言」

法王ヨハネ・パウロ二世は三月三十日に発表した「生への福音」という新しい書簡の中で、人類の命を守るため、早急に立ち上げる必要性を訴えている。百九十四頁に及ぶこの文書は、カトリック信者に向けて書かれたものであるが、胎児・高齢者の擁護という国際的問題に着目している点でも、心あるすべての人」に読んでもらいたい。

「生命を守り擁護するにあたり、特定の個人や団体のみがその役割を担ってはいけない。すべての人間の課題であり責任なのだから」と法王は強調している。

カトリック信者にとって本書は、命の尊さを説く出版物の中で最も完成度の高い、権威あるものと言

えるだろう。文書中で法王は、有史以来、教会が唱え続けてきた三つの教えを厳粛に復唱している。第一に「罪なき人間を直接的に進んで殺めるのは、不徳の極みである」(57節)。この教えを生命の始めと終わりにあてはめると、「中絶は…(中略)…道徳上の矛盾に満ちている」(62節)。また「安楽死も神の法に背く重大な過ちである」(65節)。信者なら誰しも、生命の尊厳についての聖書の教えや、十戒にある「汝、殺すなかれ」が頭に浮かんだことだろう。

人生のどの段階においても命の大切さは同じという教えは、聖書の随所に見受けられる。今日における尊い命を奪う行為は、カ

インが弟アベルを殺し、そのことを隠し否認した(「私は弟を見張っていないなければならぬのですか?」許しがたい罪を思い起こさせる。我々は妊娠中絶!といった害のない医学用語で人殺しを包み隠し、良心の呵責を感じないふりをしているのだ(11・58節)。この「死の文化」に立ち向かい、新たに「生の文化」を築こう。手始めに、カトリック世界の中から変えていこう(95節)と法王は呼びかけている。

プロ・ライフ運動の観点からも非常に興味深い意見が、書簡の随所に見受けられる。中絶に関する最近の議論で法王は、責任の大半は、女性を無視し中絶を「間接的に勧めた」相手にあると語る(59節)。また、プロ・ライフ法案の可決を強く奨励している。「法律のみが人の命を

守る手段ではないが、非常に重要な役割を担っているし、時として思想や行動に決定的影響を与え得る」(90節)と。法王は聖アウグスチヌスまでさかのぼって、「罪なき人間の生きる権利を奪う法は、それ自体、法として効力をもたない」というキリスト者の信念を引用している。

法王は、生命に関わる領域での暴力行使は認められない。だが、不正な法律に對しては、誠実なる反対姿勢」を貫くべきとの考えだ。すなわち、人々に中絶、安楽死と

いった罪への関与や手助けを求める法律は、無視しなければならぬ。特に、医師や医療機関で働く人達は、生命に

守る手段ではないが、非常に重要な役割を担っているし、時として思想や行動に決定的影響を与え得る」(90節)と。法王は聖アウグスチヌスまでさかのぼって、「罪なき人間の生きる権利を奪う法は、それ自体、法として効力をもたない」というキリスト者の信念を引用している。

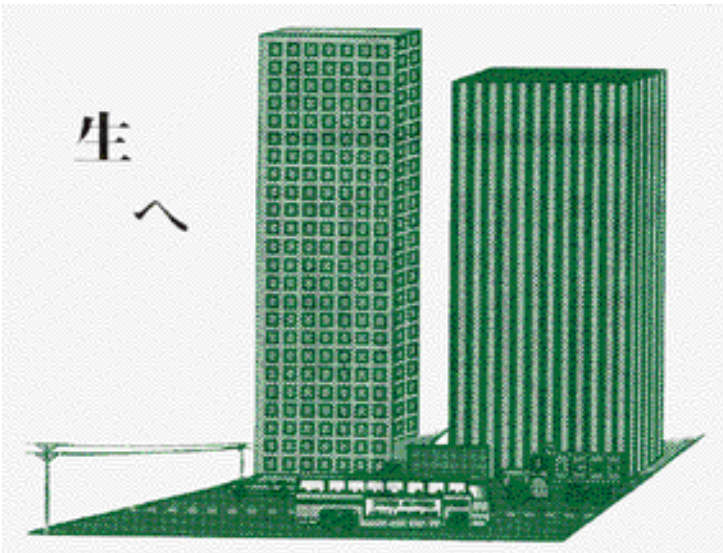
法王は、生命に関わる領域での暴力行使は認められない。だが、不正な法律に對しては、誠実なる反対姿勢」を貫くべきとの考えだ。すなわち、人々に中絶、安楽死と

いった罪への関与や手助けを求める法律は、無視しなければならぬ。特に、医師や医療機関で働く人達は、生命に

背く行為の相談、準備、実行に関わるのを拒絶する」必要がある。法王はまた、不正な法と不完全な法を区別している。中絶反対派の人間が「既に成立もしくは可決寸前の消極的な法案の代わりに、中絶を制限し減らす目的の、より厳格な法の可決」を求めて働きかけるのは「合法的で正しい」とする(73節)。

法王はまた、不正な法と不完全な法を区別している。中絶反対派の人間が「既に成立もしくは可決寸前の消極的な法案の代わりに、中絶を制限し減らす目的の、より厳格な法の可決」を求めて働きかけるのは「合法的で正しい」とする(73節)。

法王はまた、不正な法と不完全な法を区別している。中絶反対派の人間が「既に成立もしくは可決寸前の消極的な法案の代わりに、中絶を制限し減らす目的の、より厳格な法の可決」を求めて働きかけるのは「合法的で正しい」とする(73節)。



法王は、女性にとつての「新しいフェミニズム」が必要と考えている。つまり『男性支配主義』を真似ることを禁じ、社会におけるあらゆる側面で女性の資質を認め、性差別、暴力、利用される等の問題の克服を試みているのだ(99節)。

そして、過去に中絶をした女性を許し、いたわろうとする。彼女達こそ「あらゆる人間の生存権保障を、声を大にして訴えてくれるはずだ」からと(99節)。

法王はさらに、いくつかのプロ・ライフ刊行物に道徳観を表明している。「胎児研究といった破滅的行為は、中絶と同様に許さない」(63節)。「初期段階の胎児の存在価値について議論したところで、人を殺すことの言い訳にはならない」(60節)。

「自殺の手助け」(患者に致死量の薬を投与する)も安楽死と同様、罪深い。例

え患者の要請に従ったとしても、事の重大さや生命の尊厳を無視した違法行為であるという事実に変わりない(60節)。

例えば、無脳症の子供がまだ生きてるうちから臓器を摘出するといった試みは「密かに行われる、深刻で現実的な安楽死の一つと言える」(15節)。

法王の力強い言葉は、世界中のプロ・ライフ派の人々やプロ・ライフ団体を勇気づけてくれるだろう。じっくり読んでほしい書簡だ。

National right to life, 4/6/95

子どもを愛するとは

ジェニー・タグラッソン

「私は母親です。」10年前、私はこの言葉を言えませんでした。それでも母になる事は私の唯一の望みでした、夫の懸命の慰めにも関わらず、私はよく夜を泣き明かしたものでした。

他の夫婦と変わりなく、私達も新しい家庭を築く前に、まず一人とも学校を卒業し、就職して子どもを持ちたいと考えていました。子どもを持つという事は自然に起こるものだと単純に考えており、何か障害が起こるうとは夢にも思わなかったのです。

しかし、結婚して9年にもなるといつのにも子どもはできず、ついに私達是不妊症の専門医を訪れる事になりました。夫も私も子どもが欲しくて、親になる事を心から望んでいました。子どもを作るための努力

と、他の人々にはいと簡単単に恵まれる子どもが自分達には恵まれない悲しみとが、私達の心に重くのしかかっていました。

さらに、不妊症など悩んだ事もないような人が中絶しているという事実が、苦しみに追い討ちをかけました。なぜそういう人は、赤ちゃんが誰か他の人の元で愛され育てられるように、子どもに生きるチャンスを与えないのでしょうか。

こんな状況の中で、日々の祈りだけが心の支えでした。また、不妊についての本もたくさん読みました。医師は非常的に確かな指示を出し、私達もそれに従いました。と同時に、養子縁組をする事を検討しました。というのも、夫も養子で、暖かく愛情あふれる

家庭で育てられたからなのです。しかし、いくつかの養子斡旋所と連絡を取ってみて、乳児を養子にもらうには1年かそれ以上待たなければならぬ事がわかりました。

友人達は私達を慰め、励ましてくれました。ある友達には、「もう少し時間がかかるわよ」と言われましたが、既に10年近くの時が流れている事を話しませんでした。

診察と検査によって、私は子宮内膜症を患っており、このために妊娠が不可能に近い状態である事を医師に告げられました。しかし、矯正手術を受ければ妊娠する可能性が高まる望みもありました。

私はどうしても子どもが欲しくて、そのためなら何でもする覚悟でした。ですから手術し、その後ホルモン療法を受けました。そうしておよそ1年後、ついに妊娠したのです。

帝王切開によって可愛らしい女の子を授かりました。その2年半後、再び帝王切開により今度は男の子が生まれました。

私達が両親となる事ができたのは、神様の意思に他なりません。世の中には、私達のような悩みを抱えて最後まで子どもに恵まれない夫婦がたくさんいます。それは努力が足りないからではなく、本当になすすべがないからなのです。

養子縁組も今日では難しく、またお金がかかりますが、それを困難にしていく最も大きな理由は、養子になる子ども数が減っている事です。子どもを生んで養子に出すより、中絶を選ぶ女性が多すぎるのです。40年前なら養子に出す事が中絶に代わる手段となり得ましたが、今日では養子の方が難しくなっています。未婚の女性が出産する事も中絶する事も

同じように感じているのです。

しかし世の中には、子どもを愛するチャンスを中心に待ち望んでいる愛情深い未来の両親がいるのです。

世界中のどんな財宝よりも子どもの方が大切と考えている母親の一人として、私は一っだけ望む事があります。それは、中絶を考えている人を含めて全ての女性が、決断を下す前に私の立場と入れ替わる事ができればいいのに、という願いです。

もしそうできれば、私はいこう説得します。お腹の中の生命に対する自分の行いをよく考えて下さい。子どもはとても大切なものです。なぜなら、これから養子として喜んで育てようという人に、親になるといっすばらしい贈り物をしてくれるからです。

1月

Pro Life Hero

今月号より全国のプロ・ライフ仲間を紹介していききたいと思います。

まず、広島に住み、三人の子どもさんを育てている味村真知子さん。末のお子さんがまだ、一歳でお忙しいはずなのに、事務所からのインタビュに翌日にはレポート用紙三枚にびっしり応えてくれた郵便が届きました。その末のお子さんを妊娠中、シスターからプロ・ライフ・ニュースをもらったのがきっかけでこの活動をされるようになったそうです。そんな彼女の心の底に流れている思いは、一番目と二番目のお子さんの間で八週目のお子さんを一人流産され、その子への鎮魂の心が今の彼女の活動を支えているようです。

毎月ニュースを40部から50部購入してくれ、資料もたくさん購入して下さるので、どのように活動されているのかしらと伺つと、子どもさんの学校に寄付され、かかりつけの歯医者さんにも、生と死「赤ちゃん」「若い生命セット」とニュースをワン・セットにして、常時、五セットずつはあるようにしていると。そして、身の周りの妊娠中の人や、ニュースを初めて配る人には同じようにセットで渡されているようです。生協の仲間、近所の人、教会の聖書研究、若い母の会、セミナーの仲間にもいつも渡して下さいています。

せめて、自分の周りにいる人だけにでも知って欲しいし、子ども達が性情報に踊らされて、間違った知識を持つ前に、正しく知って欲しい。でも、自分自身が、人の命は地球より重い」と心の底から感じて

叫べる人間になりたいというのが一番の理由なのかも知れませんが、とおっしゃる味村さんも、時には、時間的にも、経済的にもまだこんな活動をするには無理なのかなと思うこともあります。反応がイマイチなので、かけているお金が無駄なのではないかと思ってしまうのです。それ以上の輪の広がりもないし、でも、胎児の叫ぶ声が聞こえてくるようで、一人でも多く殺されずに済むようにと思っ直しては毎月配っているのが現状です、とおっしゃっています。

私の決心・・婚前交渉をしない

私が婚前交渉をしないと決めたのは、両親をがっかりさせたくなかったからです。母は私がまだ小さな頃からセックスについて教えてくれました。そして禁欲がいかに大事か説いてくれたのです。「道徳は決して変わることはないものよ」と言った母の言葉は真実だと思えます。

友人や親戚や同僚が婚前交渉の結果何も良いことが得られていないのを見てきました。例えば、同僚にシャロンという女の子がいます。彼女は同棲していて、私が転職のためその会社を退職する時も、まだ彼と結婚していませんでした。彼女自身なぜ彼氏が自分と結婚したからなのか分からないように思いました。彼女としては結婚という生涯の契約を結ぶ心の準備が出来ていましたし、子どもを欲しがっていません。でも彼はただ一緒に暮らすという状況に満足していて、何一つ不自由を感じていないようでした。同棲して、婚前交渉を持ったことは、何一つシャロンのためにはならなかったのです。彼女は人生の大変貴重な時期を浪費した挙句、傷ついただけでした。

又、別の友達の中には二度目から三度目のデートで性交渉を持ったという人達もいます。そしてその後、相手の男性は逃げ腰になり、友達のままいよっじやないか、等と言っらしいのです。彼女たちは戸惑い、傷つき、幻滅します。私は婚前交渉は自分の価値を下げるのだと思います。前戯や性交を軽々

しくは考えていません。もしそのような行為をしたとしたら、自分で自分がごくプライベートな領域を侵されている(しかも自分の意思で)かのように感じたいでしょう。セックスは与え続けることであり、決して、ギブ・アンド・テイクとかテイク・アンド・テイクではありません。未婚の女性として、もしそんな行為が過去にあったとしたら、私の未来の夫がどう思うだろうかと思っただです。

十六歳の時、私はある少年とつきあい始めました。二年ほども付き合ったと思います。その間、よく二人はセックスのことで喧嘩しました。彼は私を言いくるめ、私は愛撫を許しました。その事で私は非常に良心の呵責を覚え、危険を侵しているように感じました。私はだんだん彼を押しさえきれなくなり、その事が私を落ち着かなくさせ

ました。ある晩、彼は私に処女を捨てるよう説得しました。私は彼に「私と結婚してくれる？」と聞きました。彼はしばらくの間何も言いませんでしたが、嫌々という感じで「うん」と言いました。でも、その時、私は彼が本気で言ったのではないという事が分かりました。結局その時を期に私達は別れ、それ以来彼からは何の連絡もありません。

婚前交渉には危険が多すぎます。私は未婚の母になりたくありませんし、独身女性として悪い評判を立てたくありません。結婚当日の夜を楽しみに待ちたいのです。それは私の人生で最も大切な日の瞬間です。私のパートナーであり、愛する人に「誓います」と言った言葉の後、その特別な瞬間を昔の若気の至りなんかで汚したくありません。私達が

最初に愛し合う時は、完全な、そして唯一の約束が交わされる時であって欲しいのです。自分自身を夫に捧げることで、夫に伝えたいのです。「愛してわ。あなたは私にとって特別な人。心からあなただけを愛し、他の誰をも男性として愛しません。あなたに對する私の愛は完全なものです。100%完全なものです。」

婚前交渉をしていたカップルの結婚式に何度も出席しました。彼らは結婚まで待てず、待つことは不便で時間の無駄だと思っただです。今や初めての性交渉の魅力も薄れ去り、結婚式の夜に何一つ期待するものもありませんでした。自分の子どもに対して、私自身がよい例でありたいと思います。いずれ子ども達にもセックスについて話さねばならない日が来るでしょう。子どもにお

母さんは結婚するまでセックスしなかったのと聞かれた時、正直に答えられるよう、そして子どもに手本となれるようありたいのです。

私はクリスチャンであり、神がセックスについてお教えになっっている事を信じているからです。コリントの信徒への第一の手紙の第六章十八節でパウロは「姦淫することなかれ」と述べています。姦淫を辞書で引くと、「自らの意志で未婚の男女が性行為を持つこと」とあります。新約聖書にはこれより恐ろしい罪はないとも書かれています。第七章九節でパウロはまたこうも言っています。「もし恋人同志が欲望を抑えきれないなら、欲望で身を滅ぼすより、結婚した方がよい。」聖書に間違ったことが書かれたことは一度もありません。聖書は、婚前交渉がどんな結果に終わるか

警報を鳴らしてくれていません。そして、私はその警報を忘れることのないようにしようと思ったのです。

「九十年代なんだから」という言葉をよく聞きます。だからどうしたと思わずにはいられません。私にしてみれば、それは、婚前交渉を大目に見るためのもうまい言い訳にしか聞こえないのです。成長と時勢の変化の激しいこの時代を婚前交渉の正当化の理由にするなんて、的外れもいいところです。

婚前交渉を持つことは、それだけで性病や望まない妊娠や中絶やエイズの可能性が高くなるのです。人の人生を一生ひどく変えてしまう行為なのです。私は私自身のため、私自身も心身ともに健康で幸せにいたるために婚前交渉をしないと決めました。自分を愛しているなら、それは自分を大事にするとい

う事です。自己中心的になるという事ではありませんが、自分を尊重すれば、一番大事な宝物を手にする事が出来ます。それは心の平安です。

私は婚前交渉をしないと決心したお陰で、人生を送りやすかったと思っています。少しも後悔はしていません。

リー・タータニヤン